

岩倉山中腹遺跡

—昭和55年（1980）岩倉台ニュータウン造成に伴う発掘調査報告—

付．楡木遺跡出土甕棺資料紹介

はじめに・例言

巻頭カラー写真

第1章 岩倉山中腹遺跡の発掘調査と資料の経緯

第2章 遺跡の概要

第3章 周辺の地理的環境

第4章 周辺の歴史的環境

第5章 岩倉山開発の状況

第6章 調査区の設定と遺構の分布

第7章 平成27年度の業務内容報告

第8章 発掘調査報告

1) 遺構編

2) 遺物編

第9章 考察

第10章 まとめ

おわりに

2016年

熊本博物館

はじめに

熊本市における埋蔵文化財の調査体制が確立するのは昭和63年度。それ以前は開発工事に伴って遺跡が発見された場合、市文化課（当時）と熊本博物館が協力して発掘調査を行う状況でした。その成果については『熊本市調査報告書』（昭和42～53年）等に報告された例もありますが、それ以降、昭和の時代に市が実施した発掘調査について「報告書」という形で刊行された例は『上南部遺跡』など一部に限られ、あまり多くはありません。

岩倉山中腹遺跡も、報告書が未刊行である遺跡の1つです。昭和55年（1980）、熊本市北区清水岩倉に所在する岩倉山中腹において、岩倉台ニュータウン造成に伴う開発工事が実施されました。その際に甕棺が多数発見されたため、連絡を受けた市文化課はじめ熊本博物館も調査に参加しました。

本遺跡の出土遺物及び図面・写真等については35年間、市文化課と熊本博物館に分散して保管されていましたが、今回の図面整理などを経てようやく報告書刊行に至りました。残念ながら当時の発掘成果を漏れなく完全に網羅した報告とはなりませんでしたが、当時の発掘関係者や地元住民の方々への聞き取り調査結果も併せて記載するなど、現時点で可能な限りの調査報告を行いました。

この報告が、学術的資料として今後広く活用されるとともに、埋蔵文化財保護への理解を深めていただくための資料となれば幸いです。

最後になりましたが、報告をまとめるに際しご協力いただいた関係者の皆様に対しまして、厚く御礼申し上げます。

例 言

- 1 本稿は、岩倉台ニュータウンの造成工事に伴い、昭和55年2月1日～4月30日に実施した熊本市北区清水岩倉に所在する「岩倉山中腹遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告である。
- 2 発掘調査は熊本市文化課（当時）の要請により、熊本博物館（富田紘一）も参加した。
- 3 現地での調査は、大城康雄・柿内順也（嘱託職員）・岩崎さゆり（臨時職員）など、市文化課の職員が中心となって実施した。
- 4 甕棺など遺物の整理作業は市文化課及び熊本博物館（富田紘一）が、実測は調査後に熊本博物館（富田紘一）が中心となって行った。
- 5 遺構検出図のスキヤニング作業及びデータ加工業務は、平成27年度に株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
- 6 アナログ資料のデータ化においては基本的に調査当時の図面・内容等に従い、変更していない。また記載漏れの情報（例：遺構断面図レベル数値等）も補完できないため、そのまま掲載した。
- 7 遺物の実測・トレースは、平成27年度に株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託したが、富田紘一が当時実測していた図面も併せてトレースし、本稿に報告している。
- 8 甕棺など整理後の遺物は、熊本博物館（熊本市中央区古京町3-2）に保管している。
- 9 「付、榆木遺跡出土甕棺資料紹介」も併せて掲載している。
- 10 本稿の執筆および編集は、平成28年度に熊本博物館（美濃口紀子）が行った。



1号：单棺（黒髪式）



12号：複棺（黒髪式）



36号：複棺（須玖式、中形棺）



2号：单棺（黒髪式）



18号：单棺（須玖式、大形棺）



42号：複棺（須玖式、大形棺）



7号：单棺（黒髪式）



25号：单棺（須玖式、大形棺）

写真1 岩倉山中腹遺跡出土甕棺



写真2 造成工事中の岩倉山 空撮（註1より転載：一部加筆）

岩倉山周辺



※昭和57年（1982）7月～10月撮影



第1図 岩倉台団地 地図（註2）

※調査区の位置は不明



写真3 岩倉山中腹遺跡遠景（北西側より撮影）

※平成28年(2016)4月3日撮影



写真4 岩倉山山頂からの眺望（北側をのぞむ）

※平成28年(2016)4月3日撮影

第1章 岩倉山中腹遺跡の発掘調査と資料の経緯

岩倉山中腹遺跡は「岩倉台ニュータウン」の宅地造成（写真2・第1図）に伴って発見され、昭和55年（1980）2月から緊急発掘調査が行われた。調査主体は熊本市文化課（当時：嘱託職員の大城康雄氏・柿内順也氏ほか担当）、調査対象面積は約20,000㎡、調査期間は約3ヶ月であった。発見された遺構は甕棺墓・配石など、遺物は甕棺のほか土師器などが出土している。

当時、発掘調査に関わった今村克彦氏（元熊本市文化課：課長）、富田紘一氏（元熊本博物館：学芸員）、岩崎さゆり氏（元熊本市文化課臨時職員）の話によれば、当時（昭和62年以前）はまだ文化課の組織・調査体制が不十分な時代であったため（岩倉山中腹遺跡に限らず）、開発工事で遺物発見の連絡が熊本市に入ると、市文化課が現場に駆けつけ、開発業者と打合せを行い、発掘調査に至った場合は熊本博物館から専門職員の応援を行っていたという。また調査組織としてその度に「調査委員会」を立ち上げることも多かった。この前後（S50年代）の熊本市教育委員会による発掘調査事例のうち、報告書が刊行されたものをまとめると、第1表のようになる。

第1表 熊本市教育委員会による発掘調査（S50年代）

年度 / 西暦	発掘調査報告書	調査主体(組織)
S 50/1975	熊本城跡旧坪井川畔遺跡調査報告書(厚生年金会館増築)	熊本城調査委員会
S 52/1977	鳥井原遺跡発掘調査報告書	鳥井原遺跡調査団
S 53/1978	下南部遺跡発掘調査報告書(市営住宅建設計画)	熊本市教育委員会 熊本市住宅協会
S 54/1979	上南部A、下江津・上ノ門、黒髪浦山、健軍ミョウゲンジ	熊本市教育委員会
S 54/1979	熊本城不開門坂道復元工事報告書	熊本市教育委員会
S 55/1980	長嶺遺跡発掘調査報告書(託麻市民センター建設)	熊本市教育委員会
S 55/1980	岩倉山中腹遺跡(岩倉台ニュータウン造成)	熊本市教育委員会(報告書未刊行)
S 56/1981	上南部遺跡発掘調査報告書	熊本市教育委員会
S 58/1983	扇田横穴群発掘調査報告書	熊本市教育委員会

また、この頃は市文化課に収蔵庫もなかったため、発掘出土品については一時的にプレハブに収納したり、熊本博物館に保管されていたという。当時、岩倉山中腹遺跡の調査についても富田氏が駆けつけ、調査終了後は甕棺の破片接合などを実施し、整理作業が終了した大形甕棺（木枠に固定）についてはそのまま熊本博物館で保管していた。

その後35年以上が経過した現在も、これら甕棺は博物館プレハブ収蔵庫内に保管中である。接合・復元された大形の甕棺資料だけでも単棺・上甕・下甕など合計50点以上があり、一部甕棺の実測も行われていたが、発掘調査報告書は未だに刊行されていない。そのため、従来は熊本博物館 HP 上の「収蔵品検索システム」で甕棺写真と基本情報（口径・高さ等）が閲覧できるのみであった。

平成27年（2015）9月、リニューアル工事に伴う熊本博物館の引越作業の中で、発掘当時の遺構検出図がまとめて発見された（写真5）。これを契機として、当時の手描図面をデジタル化して再整理するとともに（遺構編）、長年収蔵している甕棺についても平成27年度中に実測・トレース作業を行い（遺物編）、その成果をまとめて本稿に掲載することとした。



写真5 岩倉山中腹遺跡の図面類

第2章 遺跡の概要

岩倉山中腹遺跡は熊本市の北東部、北区清水岩倉に所在し、岩倉山（標高115m）の北側に突き出した緩やかな斜面上に立地する（写真3・4）。遺跡名には「岩倉山中腹」とあるが、本書で報告する調査地点における標高は62～67mで、眼下に見下ろす平地の標高が42m前後あるため、周囲との比高

差は20m程度である。

遺跡地図によれば、遺跡の範囲は岩倉山北～西斜面さらに陸上自衛隊北熊本駐屯地の一部まで含む。

「岩倉山中腹遺跡」の報告書としては、やや西側に離れた地点（陸上自衛隊北熊本駐屯地弾薬庫）を県教育委員会が発掘した報告がある（註3）。調査面積は約114m²、出土遺物は主に包含層に伴うもので、縄文後晩期（鳥井原・御領・天城・古閑・黒川式）、弥生中期（黒髪式）の土器や石器がみられる。石庖丁も出土している。遺構は縄文晩期（黒川式）の方形を呈する住居跡などが見ついている。

また平成7年の北バイパス工事現場において甕棺墓が見ついている。岩倉山の尾根を切り通す部分の削平中に須玖式の合口甕棺を発見し調査した（註4）。ここは岩倉山中腹遺跡の範囲内でも、本書で報告する調査地点に最も近接する場所である。甕棺は1基のみで、人骨・遺物等は出土していない。

その他、岩倉山に立地する遺跡としては「岩倉山山頂遺跡」「岩倉山遺跡」が現在の遺跡地図に記載されているが、昭和46年刊行の熊本市北部地区「文化財一覧」には「岩倉山遺跡」以外は記載がないことから（註5）、昭和55年のニュータウン開発に伴う甕棺発見・発掘によって、「岩倉山中腹遺跡」の存在が認識されたものと思われる。

これら遺跡については発掘報告書等が刊行されていないため、岩倉山中腹遺跡の甕棺をはじめとする遺物・遺構等については、これまで明らかにされていなかった。

第3章 周辺の地理的環境

岩倉山は、立田山（標高151m）山系の中でも北麓に位置する。一帯の地質は金峰火山活動の古期噴出物である安山岩と、東側を覆う阿蘇溶結凝灰岩（阿蘇4火砕流堆積物）を基底とし、上層に阿蘇4風化層、更新世堆積層、完新世堆積層をのせている。立田山山系として他に、東麓に天拝山（標高120m：現在は代継宮が鎮座）、西麓に乗越ヶ丘（129m）などがある。

立田山の南側は白川が西へ流れて河岸段丘を形成し、西側は坪井川が南へ流れている。

第4章 周辺の歴史的環境

岩倉山中腹遺跡の周辺には、各時代の遺跡が見られる。主な遺跡について、簡単にまとめてみたい。

【旧石器時代】

庵ノ前遺跡から流紋岩製の三稜尖頭器や、黒曜石製の台形様石器が出土している。

【縄文時代】

庵ノ前遺跡の調査で早期の竪穴住居跡4基が確認されたほか、北バイパス建設に伴う調査で早期～晩期までの土器・石器が出土している。また岩倉山周辺には、楡木遺跡ほか押型文土器が出土する地点が多数みられる。

【弥生時代】

庵ノ前遺跡では中期の竪穴住居跡、甕棺墓、土壙墓が出土しており、北バイパス工事の際には甕棺から人骨5体が発掘された。また迫ノ上遺跡では昭和35年に人骨を伴う須玖式の合口甕棺が発見され、古閑山遺跡・楡木遺跡でも中期の甕棺が出土している。

【古墳時代】

庵ノ前遺跡で住居跡が、古閑山遺跡で箱式石棺が、迫ノ上遺跡でカマド付住居跡が検出されている。

【歴史時代】

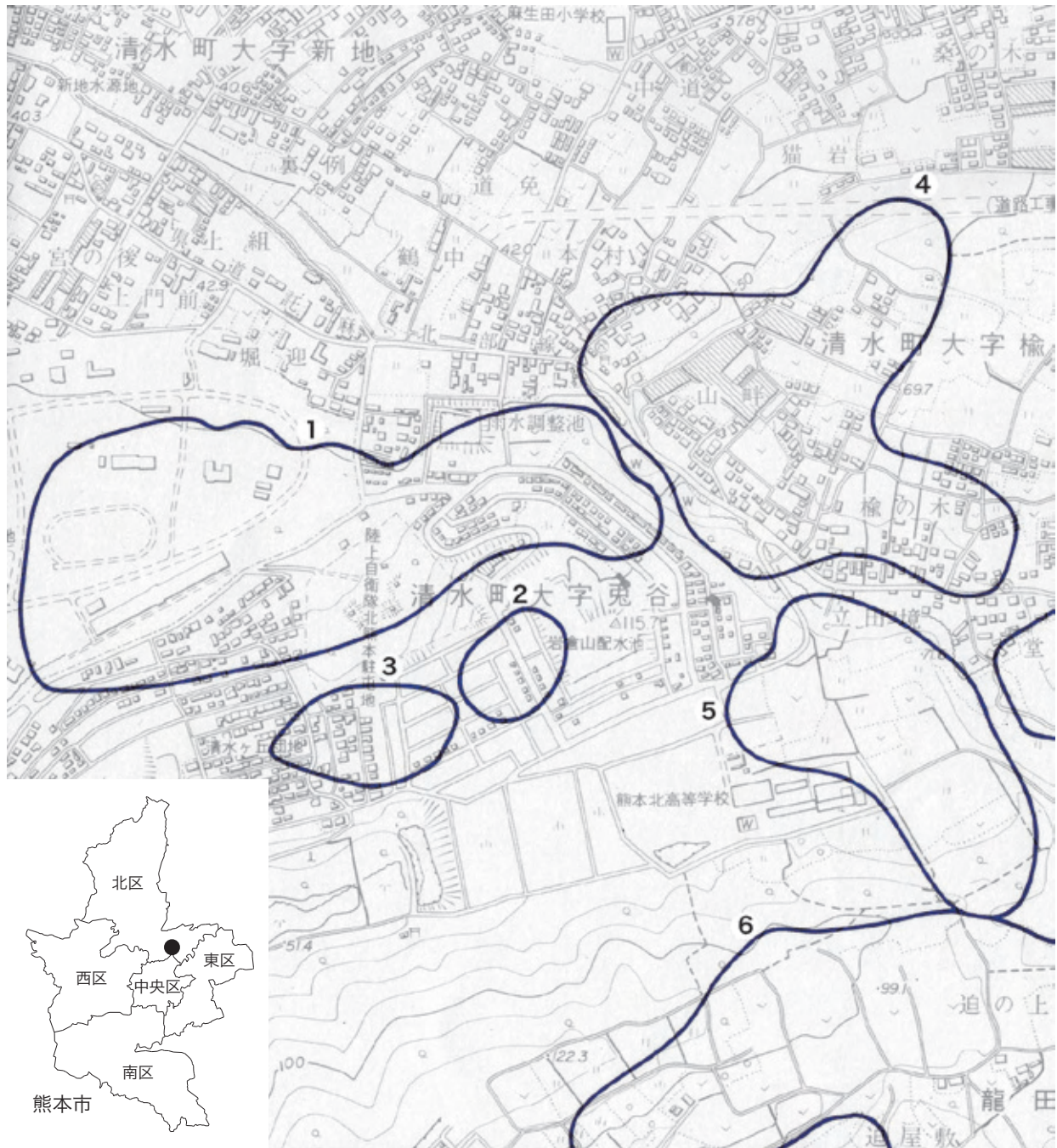
古代に入ると、白川右岸（熊本市北部）の岩倉山一帯は飽田郡に属する。迫ノ上遺跡、楡木遺跡で土師器・須恵器など古代の遺物がみられる。

中世の遺跡としては立田山南麓に立田山城跡、北バイパス工事に伴い調査された須屋城跡などがある。

近世に入ると付近は花見の名所となった。また美しい松林も続き、鷹狩りが行われたという。麻生田には細川藩の鉄砲隊の住居と武道修練所が置かれ、農業に従事しながら防備に当たっていたという。

第5章 岩倉山開発の状況

岩倉山の開発は、全国的なニュータウンブームの中で、昭和40年代後半から行われたものである（第3図）。本来の住所は「清水町兎谷」であったが、造成・分譲を機に「清水町岩倉」に変更された。



第2図 岩倉山中腹遺跡の周辺遺跡分布図（註6：縮尺任意）

第2表 岩倉山中腹遺跡の周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
1	岩倉山中腹遺跡	熊本市北区清水岩倉	縄文・弥生	弥生甕棺
2	岩倉山山頂遺跡	熊本市北区清水岩倉	縄文・古代	包蔵地
3	岩倉山遺跡	熊本市北区清水岩倉	旧石器・縄文	包蔵地
4	榎木遺跡	熊本市北区清水町榎木堂ノ前	縄文・弥生	弥生甕棺ほか
5	庵ノ前遺跡	熊本市北区龍田町上立田古閑山	旧石器～古墳	弥生中期甕棺ほか
〃	古閑山遺跡	熊本市北区龍田町上立田古閑山	縄文・古墳	縄文土器・土師器ほか
6	迫ノ上遺跡	熊本市北区龍田町上立田迫ノ上	縄文・古墳・古代	縄文土器・須恵器・土師器ほか

岩倉山の土地開発は当時、株式会社高田屋によって行われた。開発された総面積は206,500㎡である(註7)。

岩倉山の住宅分譲は当時、大蔵住宅によって行われた。濱野素文氏(岩倉台団地第1期入居者)の話によれば、住宅分譲は調整池側から始まり、次第により高所へ拡大していった。現在は、400戸を超える住宅が建ち並んでいる。

第6章 調査区の設定と遺構の分布

発掘調査区は、岩倉台団地の中で宅地として利用されている広大な土地の一部である。標高は約62～67mで、岩倉山が北側に向かって突き出した斜面にあたり、テラス状の地形をなしている。

残された遺構配置図(原図：S=1/100)を見ると、調査区全体の遺構配置を概観することができる(第4図)。

調査区のグリッドは当時、3m×3mで設定されており、南北方向は南から順にカタカナでア～ヤ(36グリッド：108m)、東西方向は西から東に



第3図 岩倉山の開発に関する新聞記事
昭和61年(1986)2月28日付 熊本市日新聞社：註8

順に数字で1～61(61グリッド：183m)である。したがって、調査区設定の総面積は19,764㎡ということになる。

但し等高線及び検出遺構(甕棺ほか)の記載が南北方向は「ク～ヤ」(29グリッド：87m)に限られ、東西方向は「31～41」(11グリッド：33m)に限られており、図面に「未掘区」の文字も数ヶ所見られることから、実際に発掘を行った面積は、2,871㎡程度であったと推測される。

一方、遺構検出図として1号～52号甕棺(原図：S=1/5)等が、さらに遺物検出図として土師器出土状況(原図：S=1/2)等が残されていた。

第7章 平成27年度の業務内容

今回見つかった図面類については、平成27年度に業務委託を行い、その多くをデータ化した。具体的な委託内容としては、大判図面(A2サイズ以上)のスキャニング、デジタル処理(しわ・破れ・汚れ等の除去、歪み補正、角度調整)、写植(手書き文字のデータ入力、方角表記やスケール表示の統一)、図版レイアウト等である。

また併せて、昭和55年(1980)の発掘調査以来、熊本博物館収蔵庫内に保管している甕棺についても、あらためて実測作業を行った。この作業についても業務委託を行った(甕棺の実測・トレース・図版レイアウト等)。

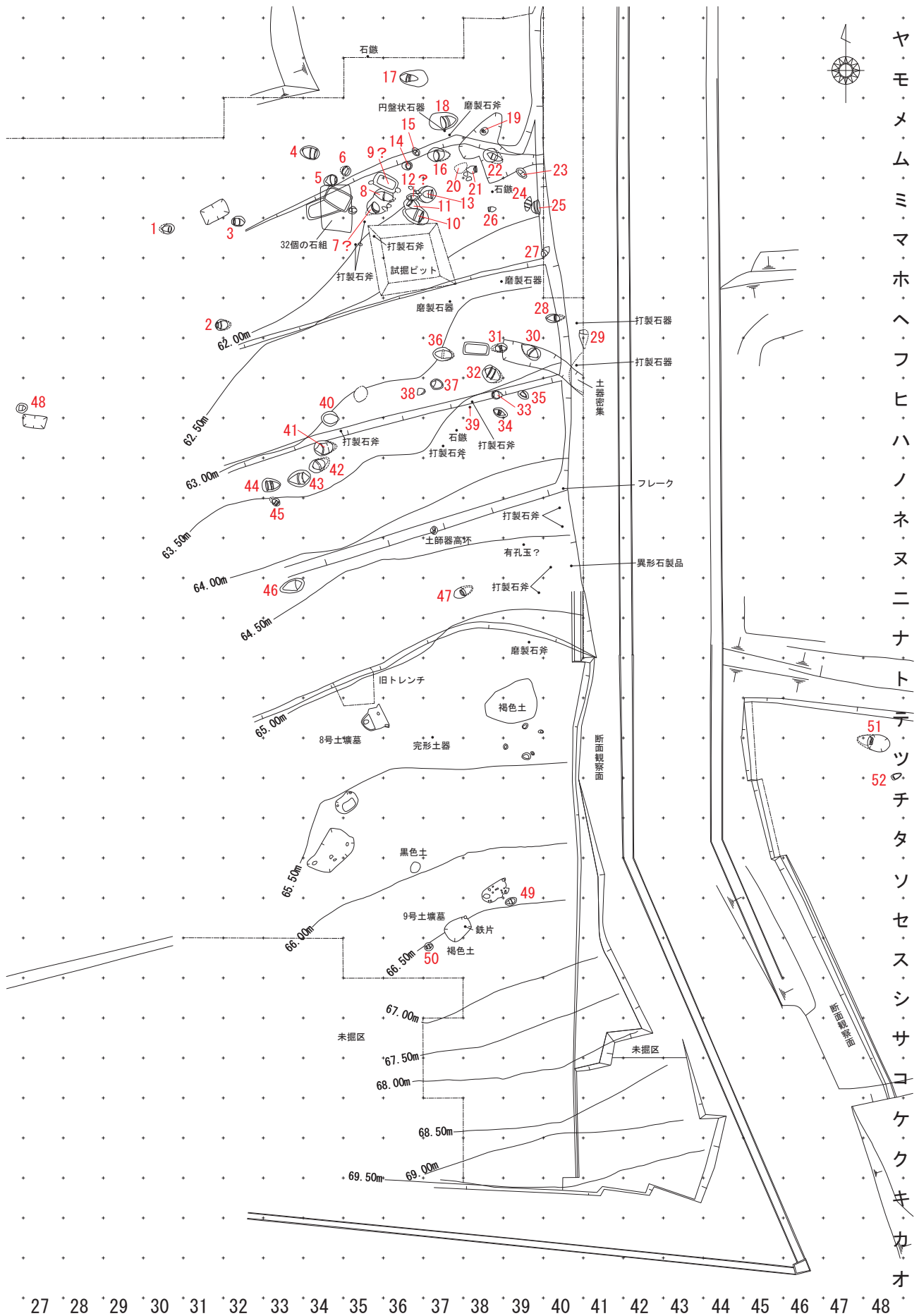
本稿は、こうした一連の作業を経て得られた遺構・遺物の調査成果について報告するものである。

第8章 発掘調査報告

1) 遺構編

例言でも述べたように、アナログ資料のデータ化においては基本的に調査当時の図面・内容等に従い、基本的に手を加えていない。そもそも調査区全体の遺構配置図(第4・5図)も、これが現在の岩倉台団地内でどこにあたるのか不明である。一帯は大規模開発による土地改変を受けており、今回は関係者聞き取り・地元住民聞き取り・現地での検証作業を行ったが、残念ながら場所の特定には至らなかった。

また遺構検出図についても、図面自体が残されて



第5図 遺構配置図 部分拡大 (S= 1/400)

※図中の写植等は S55当時実測図のまま。但し、壙棺の号数「1号～52号」のみ今回検証し、追記した。

いない甕棺（8・12・27号）や、あるいは遺構検出図があっても記載漏れの情報（例：遺構断面図レベル数値ナシ・方位表記ナシ・層位表記ナシ等）も多々ある。

本章ではまず、発掘調査区の土層について触れておきたい。当時の遺構検出図の中に「暗褐色土」「黄褐色土」などが記録されている断面図もいくつか見られる。それらをまとめ、図面からおおよその厚さを復元すると、発掘調査区における層序を以下のような概念図にまとめることができる。



第6図 調査区土層断面概念図

ところで遺構断面図を見ると、甕棺埋設の深さは多くの場合、V層まで達している。また本来、遺構掘り込みの上端レベルはII層あたりと見られるが、断面図ではII層・III層が既に失われて、20号・37～39号・48号のように、甕棺自体大半を欠損したのも少なくない。実際、遺構検出の断面図で表土（I層）から甕棺までの深度がわかるのは調査区東壁線上の29号甕棺くらいであった。本遺跡は、ニュータ

ウン造成に伴う開発工事を受けて緊急に発掘調査が実施されたことから、発掘調査着手時にはすでに、重機等によって破壊・消失していた甕棺も多かったものと推察される。

遺構としては、甕棺墓が52基、土壇墓が9基確認されている。また、配石遺構も検出されている。

調査区は南北に長く、調査区北側で標高62.00m、南下するごとに標高が高くなり、調査区南側の最高位で69.50mを測る。甕棺の号数は北から南へ順に番号が振られていることから、発掘調査の順番も同様であったと考えられる。

土壇墓は遺構検出図がないことから不明な点も多いが、甕棺墓同様に一覧表が残されていたので、以下に掲載する。（第3表）

第3表 土壇墓一覧表

号数	長軸方向	全長 (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	備考	グリッド
1	W29° S	上194 下183	上129 下119	16		ミ-31
2	W20° S	265 245	115 95	24		ミ-34
3	W26° N	195 174	114 97	37		ミ-34
4	W28° N	197 158	108 87	49	9号棺の墓壇を切る	ミ-35
5	W14° S	180 163	104 79	56		ハ-26
6	W3° N	115 100	98 75	24.5		ハ-27
7	W3° N	184 170	108 90	50		フ-38
8	W66° N	79 65	53 45	14		テ-35
9	W33° S	107 96	65 51	10		セ-37

ミ-34にある2基は切り合っているようである。またハ-26・27にある2基は、他の土壇墓から西側に大きく離れた場所で互いに近接して並んでいることから、関係の深いものと考えられる。

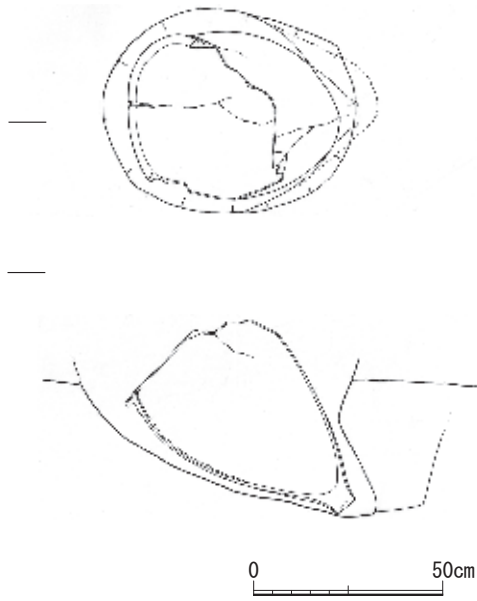
一方、甕棺の配置については、密集している箇所とまばらな箇所の差が見られる。例えば標高62.00m～62.50m付近に20基程度が密集し、少し南に離れた標高63.00m～63.50m付近に15基程度が密集しており、東西方向すなわち標高に沿った配置を見せる。やはり丘陵上に立地する甕棺墓群であることが

第4表 甕棺出土状況一覧（発掘当時作成のまま）

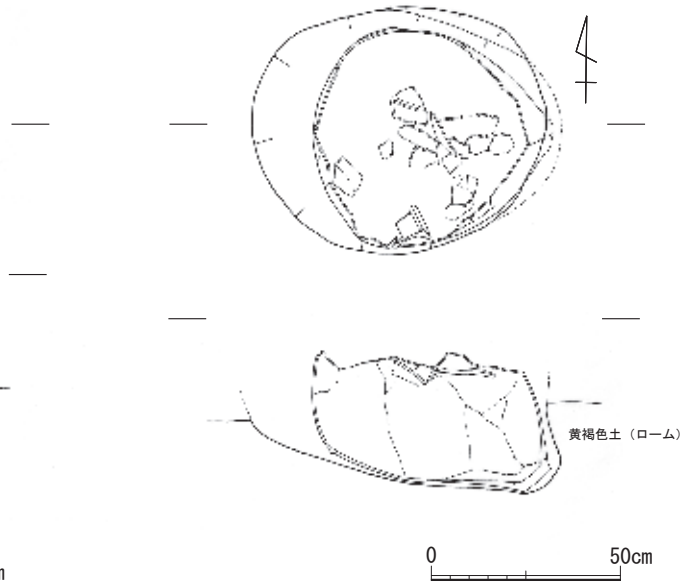
号数	型式	器種	様式	方位	傾斜	墓壇	二次壇	備考	グリッド
1	単棺	甕	黒髪	ほぼ西	42.5°	円形	○	作業中に上部を欠く	マ-30
2	単棺	壺	黒髪	ほぼ西	45°	楕円	○	耕作により上部攪乱	ハ-31
3	単棺	甕	須玖	W8° S	38°	円形	○	耕作により上部攪乱	マ-32
4	単棺	甕	須玖	W11° N	11.5°	卵形	×		ム-34
5	複棺(挿入式)	壺(上)+甕(下)	須玖?	E10° N	34°	楕円	×	耕作等により攪乱	ニ-34
6	単棺	甕	黒髪	W10.5° N	48°	隅丸方形	○		ム-35
7	単棺(石蓋)	壺	黒髪	W13° N	38.5°	楕円	×	石蓋には自然石を使用	ニ-35
8	複棺(接合式)	蓋(上)+甕(下)	須玖	E29° N	41°	隅丸方形	○	上蓋が下甕内に下落	ニ-35
9	複棺(接合式)	甕(上)+甕(下)	黒髪	W9° N	5°	楕円	○	8号棺の墓壇を切る	ニ-36
10	単棺	甕	須玖	W17° N	4.5°	隅丸方形	×	作業中に上部を欠く	ニ-36
11	単棺	甕	黒髪	W35° N	26°	卵形	×		ニ-36
12	複棺(接合式)	鉢(上)+壺(下)	黒髪	W4° S	23°	不明		小児用	ニ-36
13	単棺	甕	須玖	E27.5° N	29.5°	円形	○		ニ-37
14	単棺	甕	黒髪	E6° S	67°	円形	×	底部を欠く	ム-36
15	複棺(挿入式)	鉢(上)+壺(下)	黒髪	W42° N	47°	楕円	×	小児用	ム-36
16	単棺	甕	須玖	ほぼ西	34°	円形	○		ム-37
17	複棺(接合式)	甕(上)+甕(下)	須玖	E8° S	16.5°	卵形?	○	作業中に上部を欠く	モ-36
18	単棺	甕	須玖	W10° S	ほぼ水平	卵形	×		メ-37
19	複棺(覆口式)	鉢(上)+壺(下)	黒髪	W7° S	34°	円形?	×	小児用 上部を欠く	メ-38
20	単棺?	甕	黒髪	不明	不明	不明		耕作により攪乱をうける	ム-37
21	単棺	甕	黒髪	ほぼ東	50°	円形	○	作業中に上部を欠く	ム-38
22	複棺(覆口式)	甕(上)+甕(下)	須玖	W15° N	29.5°	円形	○	上・下甕供上部が下落	ム-38
23	複棺(接合式)?	甕(上)+壺(下)	黒髪	W43° N	3.5°	楕円?	×	小児用 埋設後移動	ム-39
24	複棺(挿入式)	壺(上)+甕(下)	黒髪	S12.5° W	14°	楕円	×	作業中上部を取上げる	ニ-39
25	単棺	甕	須玖	W4.5° N	40°	不明		24号棺の墓壇を切る	ニ-39
26	単棺	壺?	黒髪	W7.5° S	31°	不明		作業中上部を欠く	ニ-38

27	複棺(接合式)	鉢(上)+甕(下)	黒髪	S39° E	不明	不明	不明	写真撮影にみにて取り上げる	マー40
28	複棺(挿入式)	甕(上)+甕(下)	黒髪	W5° S	13.5°	楕円	○	接合部に厚く粘土にて目張する	ハ-40
29	複棺(接合式)	蓋(上)+甕(下)	須玖	N5° E	24°	不明		B区東断面中より出土 断面図のみ	フ-40
30	複棺(挿入式)	甕(上)+甕(下)	須玖	E38° S	32.5°	円形	○	上甕口縁部を欠く	フ-39
31	複棺(挿入式)	甕(上)+甕(下)	黒髪	E4° S	39°	楕円	○	溝状遺構と隣接する	フ-38
32	複棺(接合式)	蓋(上)+甕(下)	須玖	W24° N	30°	円形	○	上部の一部が攪乱を受ける	フ-38
33	単棺	甕	黒髪	W5° S	56.5°	不明		作業中上部を欠く	ヒ-38
34	複棺(接合式)	甕(上)+甕(下)	黒髪	W26° N	11°	楕円	×		ヒ-38
35	単棺	甕	黒髪	N36° W	7°	楕円	×	作業中に上部を取上げる	ヒ-39
36	複棺(挿入式)	甕(上)+甕(下)	須玖	W4.5° N	3°	楕円	○	上・下甕とも内面の焼成悪し	フ-37
37	複棺(接合式)	壺(上)+甕(下)	黒髪	W3° N	6°	不明	×	小見用	ヒ-37
38	単棺	甕	黒髪	W9° S	22°	不明		耕作により上部を欠く	ヒ-36
39	複棺(?)	鉢(上)+不明	黒髪	不明	不明	不明		下甕の形状不明	ヒ-38
40	単棺	甕	須玖	W4.5° N	37°	円形	○	耕作により上部を欠く	ハ-34
41	複棺(接合式)	蓋(上)+甕(下)	須玖	W25° S	31°	楕円	○	ほぼ完全な状態で出土	ハ-34
42	複棺(接合式)	蓋(上)+甕(下)	須玖	W24.5° S	24.5°	円形	○	粘土により厚く目張りを施す	ノ-34
43	複棺(接合式)	蓋(上)+甕(下)	須玖	W9° S	17°	楕円	×	上部が下落	ノ-33
44	単棺	甕	須玖	ほぼ西	7°	楕円	×		ノ-33
45	単棺	甕	黒髪	S42.5° E	20.5°	卵形	○	作業中に上部を欠く	ネ-33
46	複棺(接合式)	蓋(上)+甕(下)	須玖	E18° N	ほぼ水平	卵形		耕作により著しく破壊を受ける	ニ-33
47	単棺(石蓋)	甕	黒髪	W10° N	36.5°	隅丸方形	○	地山の風化礫中深く埋設	ニ-38
48	単棺	甕	黒髪	W3° N	11.5°	円形	×	耕作により上部を欠き、摩滅が載しい	ヒ-26
49	複棺(覆口式)	甕(上)+甕(下)	黒髪	W32° S	23.5°	楕円	×	作業中に上部を欠く	セ-39
50	単棺	壺	黒髪	ほぼ西	22.5°	楕円	○	作業中に上部を欠く	ス-37
51	単棺	甕	須玖	E14.5° S	12°	楕円	○	板状に整形した石蓋を使用	ツ-48
52	単棺	甕	黒髪	W24° S	40°	楕円	×	作業中に一部破損	ツ-48

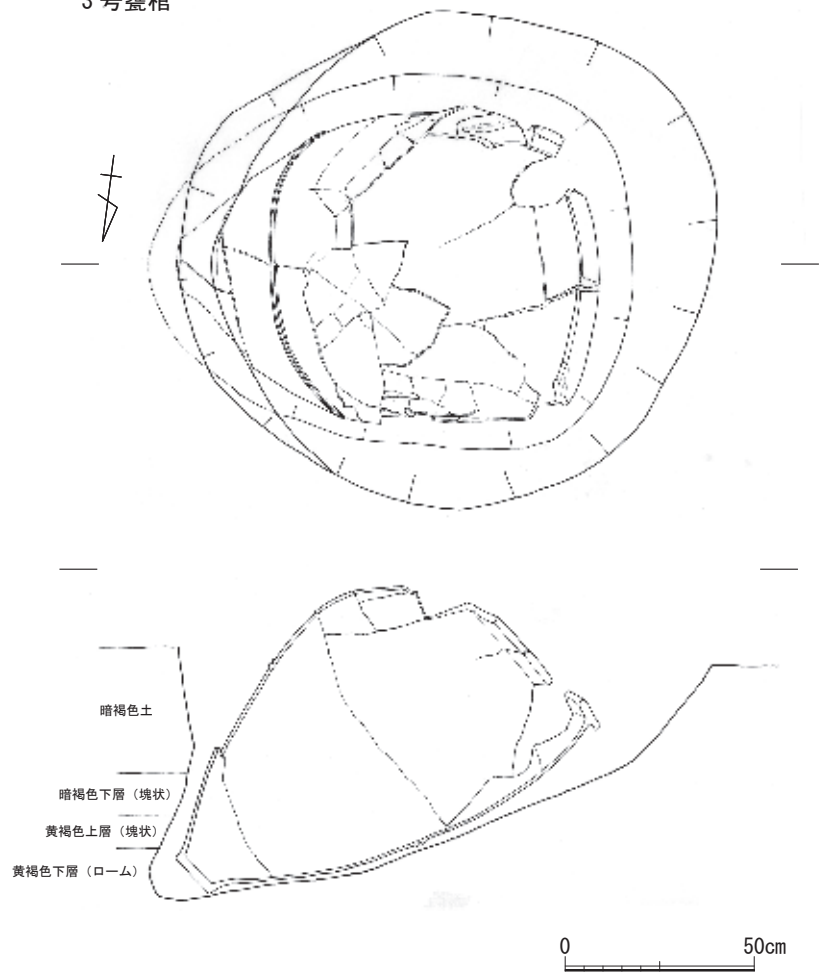
1号甕棺



2号甕棺

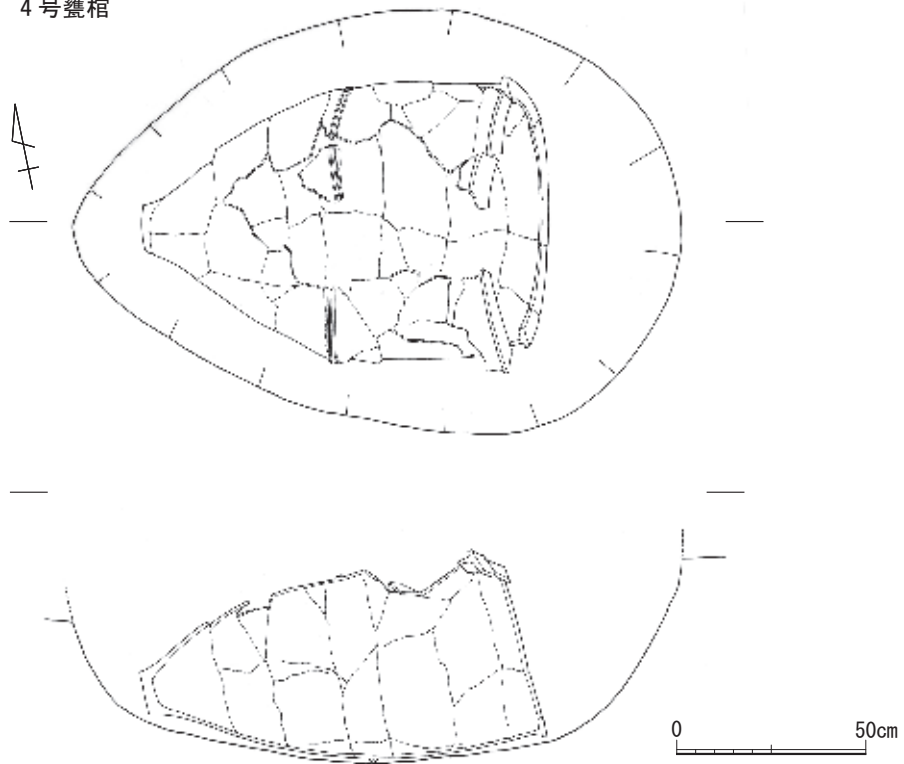


3号甕棺

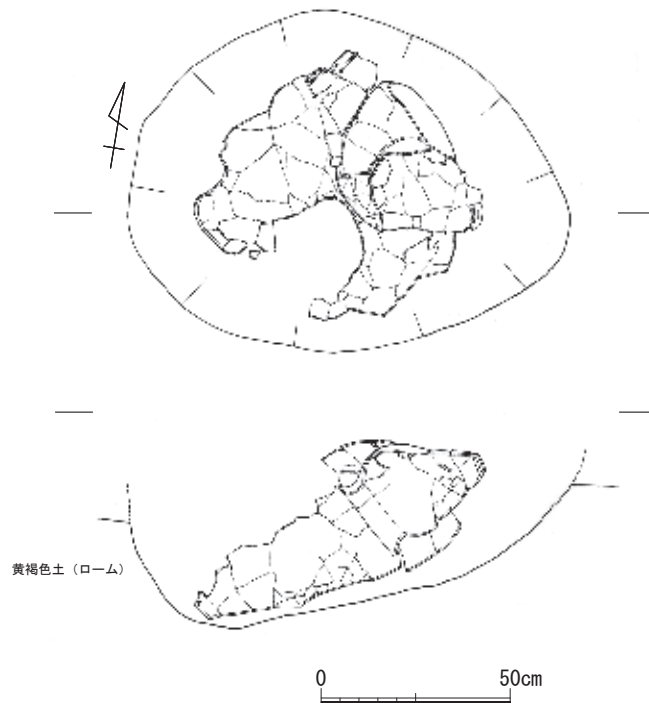


第7図 遺構実測図1 (S= 1/20) ※土層やレベル数値の記載漏れ及び写植位置等全て S55当時実測図のまま

4号甕棺

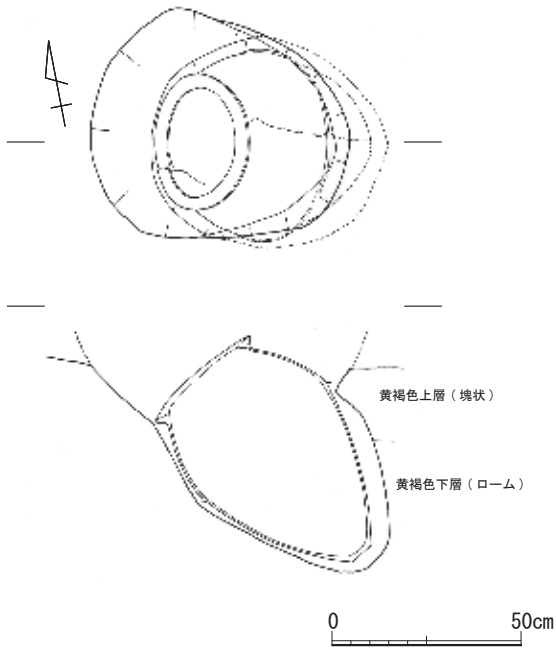


5号甕棺

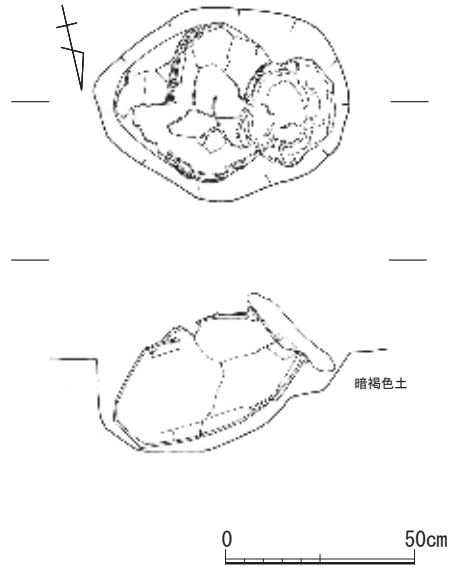


第8図 遺構実測図2 (S= 1/20) ※土層やレベル数値の記載漏れ及び写植位置等全て S55当時実測図のまま

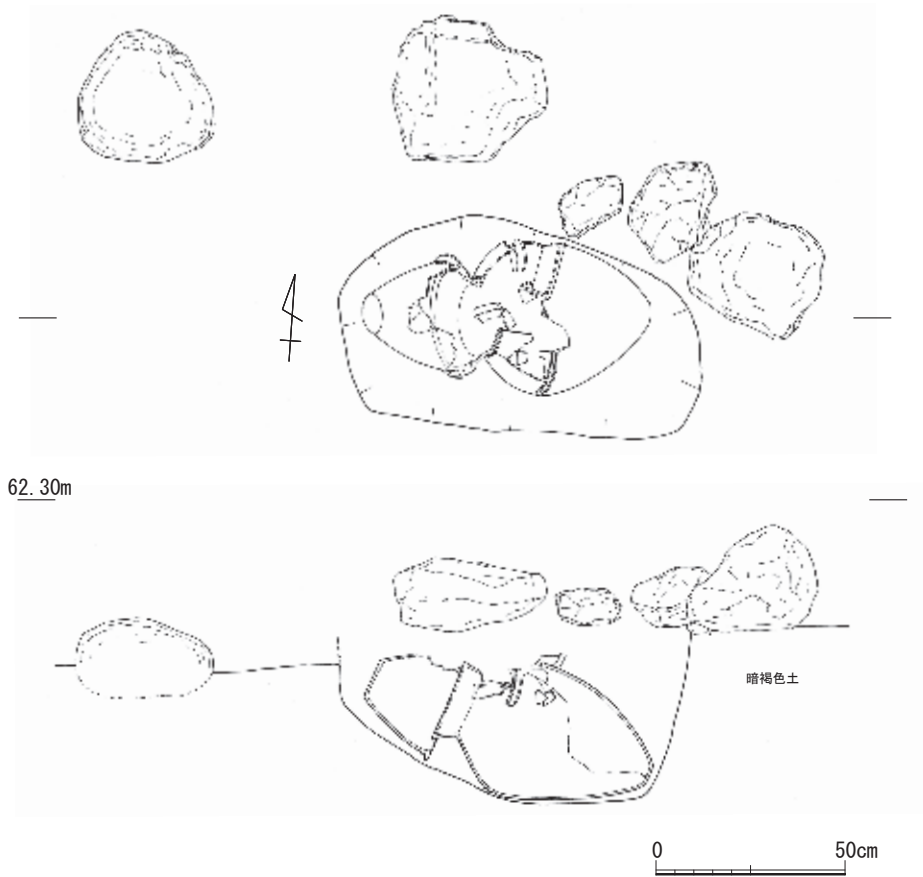
6号墓棺



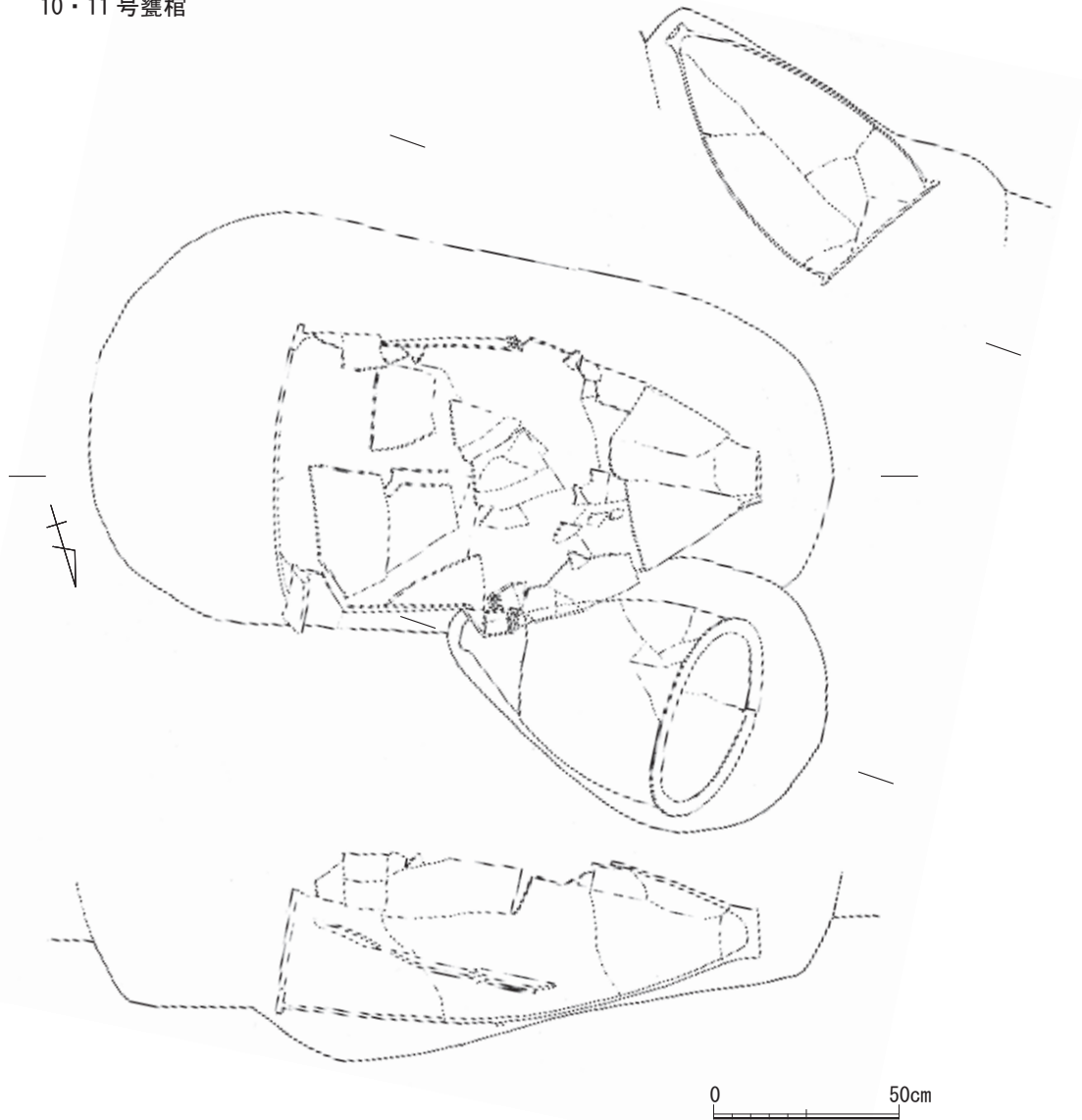
7号墓棺



9号墓棺



第9図 遺構実測図3 (S= 1/20) ※土層やレベル数値の記載漏れ及び写植位置等全て S55当時実測図のまま



第10図 遺構実測図4 (S= 1/20) ※土層やレベル数値の記載漏れ及び写植位置等全て S55当時実測図のまま

ら、地形の制約を大きく受けて、テラス状の場所に集中する傾向があるように思われる。

しかし甕棺墓のまとまり、すなわち溝で複数の甕棺が囲まれて区画されていたり、あるいは成人用の大形甕棺を取り囲むように小児棺が複数配置される、などといったグループを示す配置は見受けられない。甕棺の出土状況については発掘当時の記録が一覧表(手書き)に残されていたので、これをそのまま「第4表 甕棺出土一覧」としてまとめた。

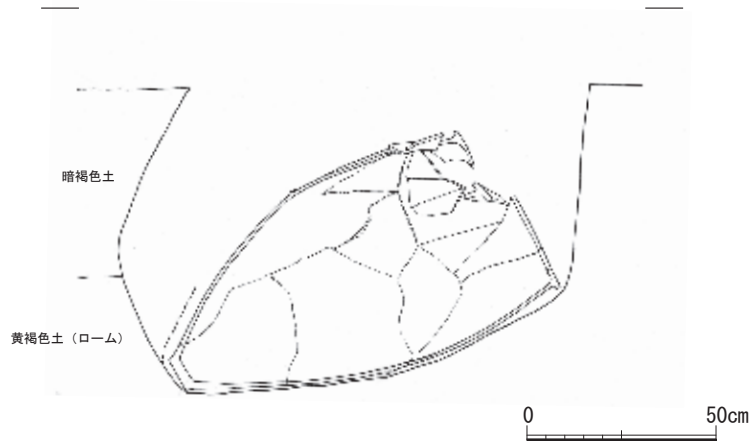
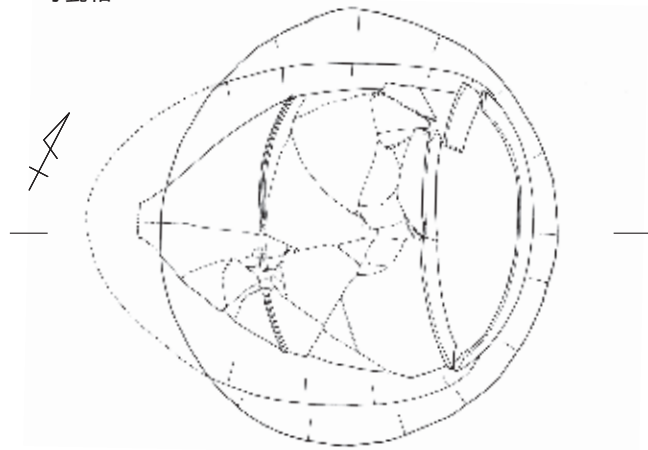
甕棺の型式として「単棺」と「複棺」があるが、52基の内訳は、単棺が27基、複棺が25基である。

次に器種としては「甕」「壺」「蓋」「鉢」がある。

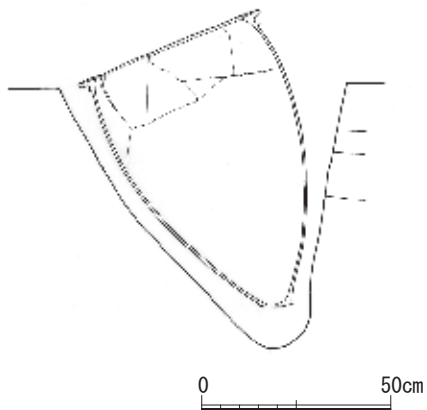
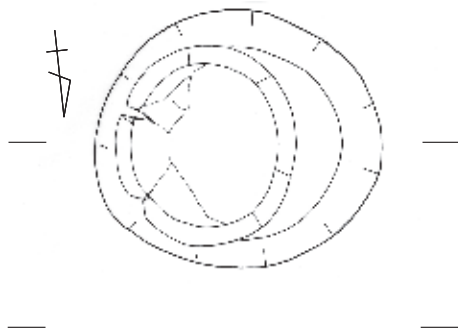
「単棺」の場合は甕が多いが壺のものもある。単棺で石蓋がない甕棺についても、本来は何らかの蓋があったものと思われ、実際18号・21号甕棺(単棺)には粘土目張りの痕跡が認められる。したがって単棺にも有機質の蓋(例えば木蓋など)が使用され、その後に腐食した可能性もある。「複棺」には「甕」「壺」「蓋」などが上下に組み合わせて使用される。「甕(上) + 甕(下)」がやや多く、「蓋(上) + 甕(下)」や「壺(上) + 甕(下)」なども複数例が見られる。

土器の様式としては在地の「黒髪式」と外来の「須玖式」が出土している。52基の内訳は、黒髪式

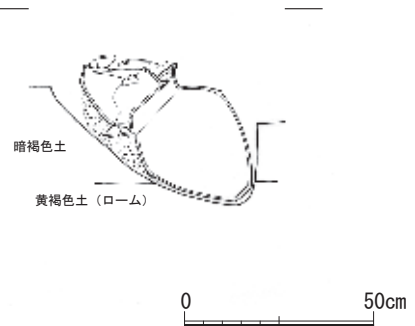
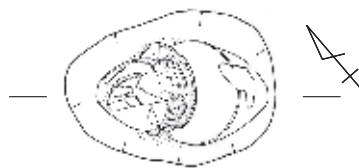
13号甕棺



14号甕棺

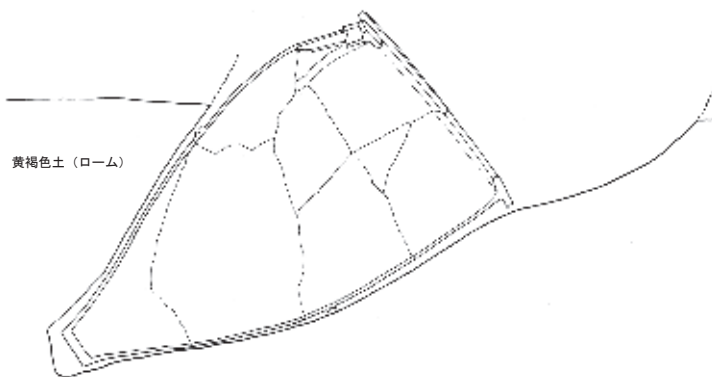
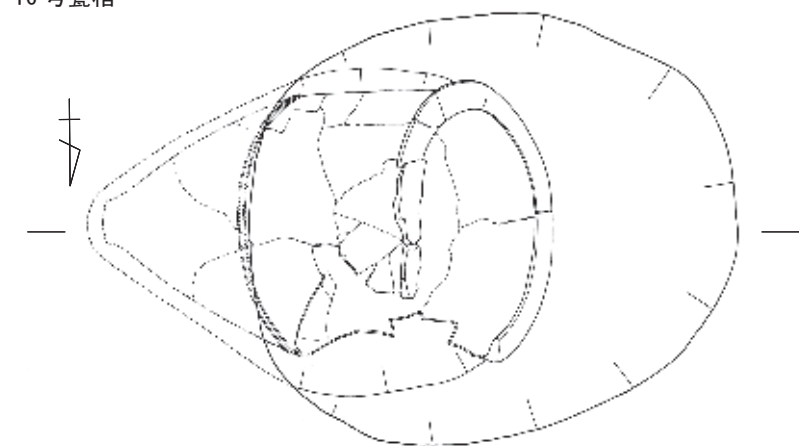


15号甕棺



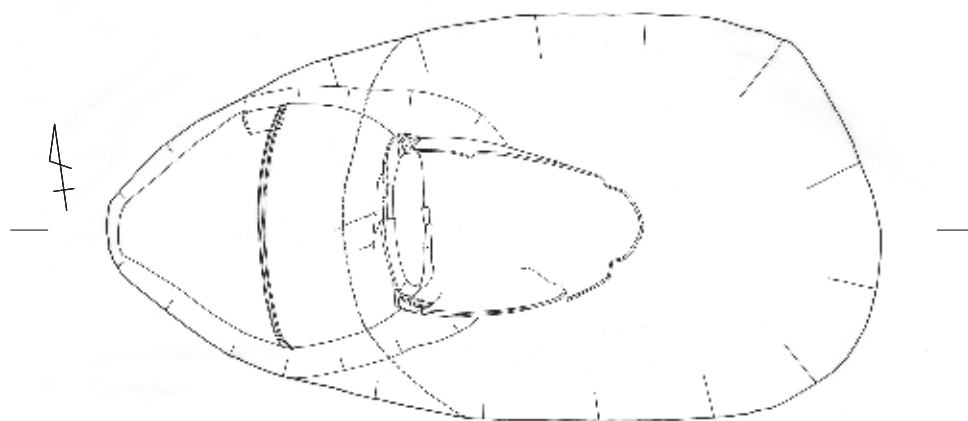
第11図 遺構実測図5 (S= 1/20) ※土層やレベル数値の記載漏れ及び写植位置等全て S55当時実測図のまま

16号甕棺



0 50cm

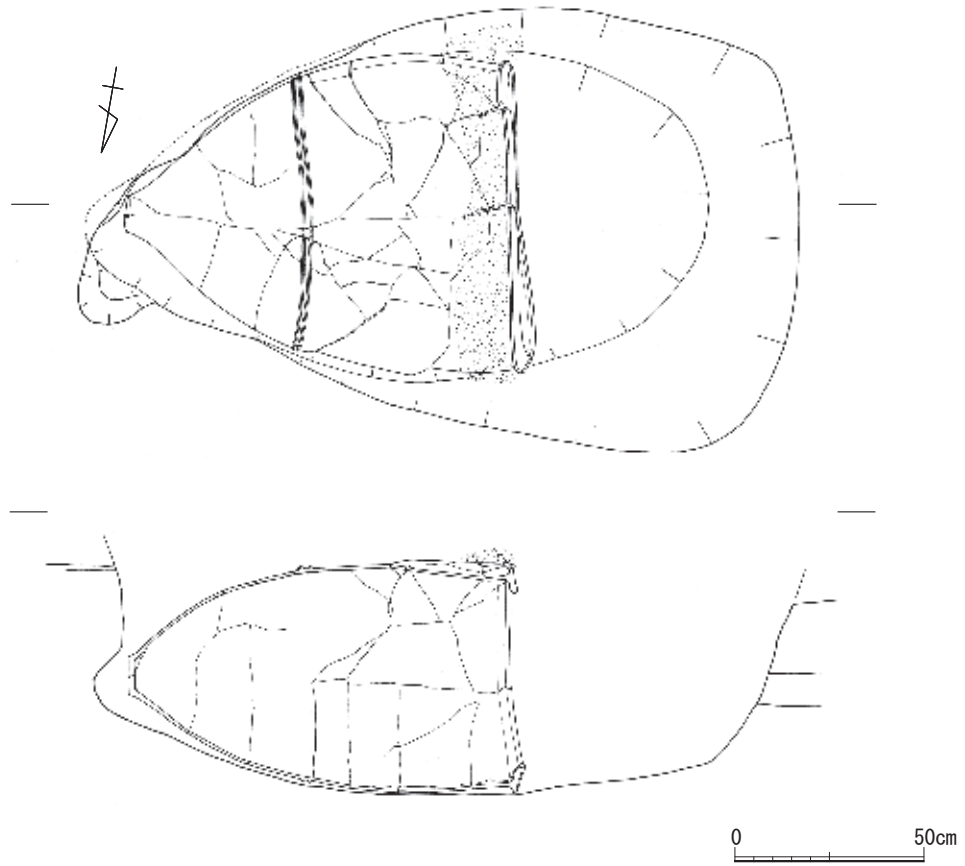
17号甕棺



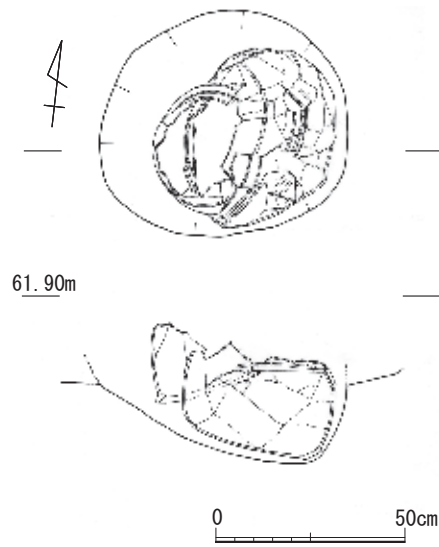
0 50cm

第12図 遺構実測図6 (S= 1/20) ※土層やレベル数値の記載漏れ及び写植位置等全て S55当時実測図のまま

18号甕棺

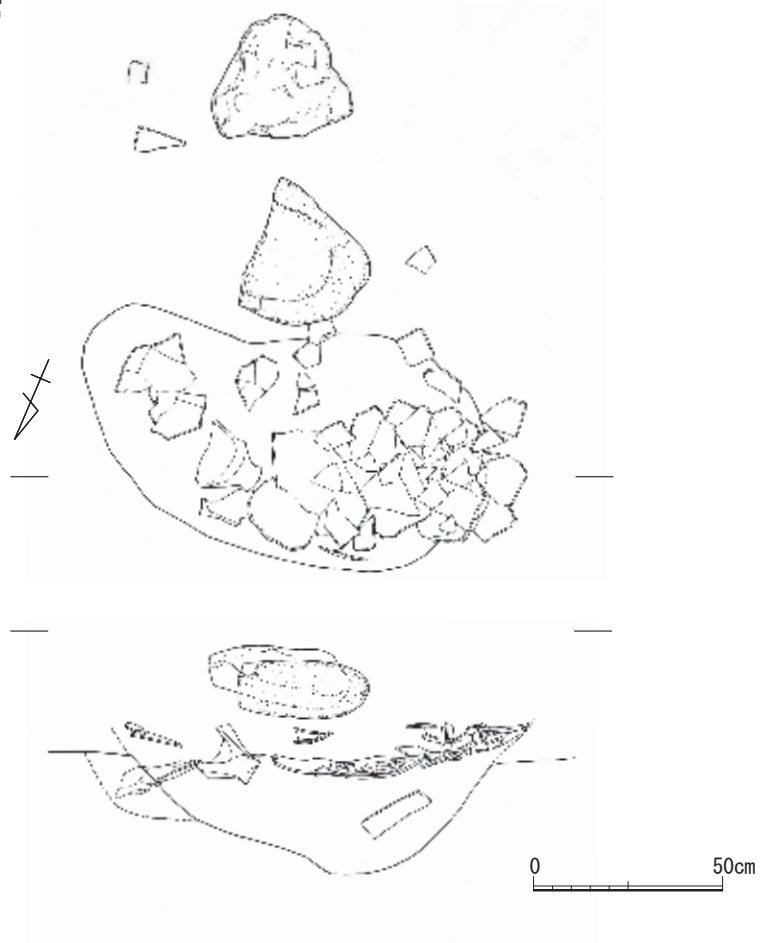


19号甕棺

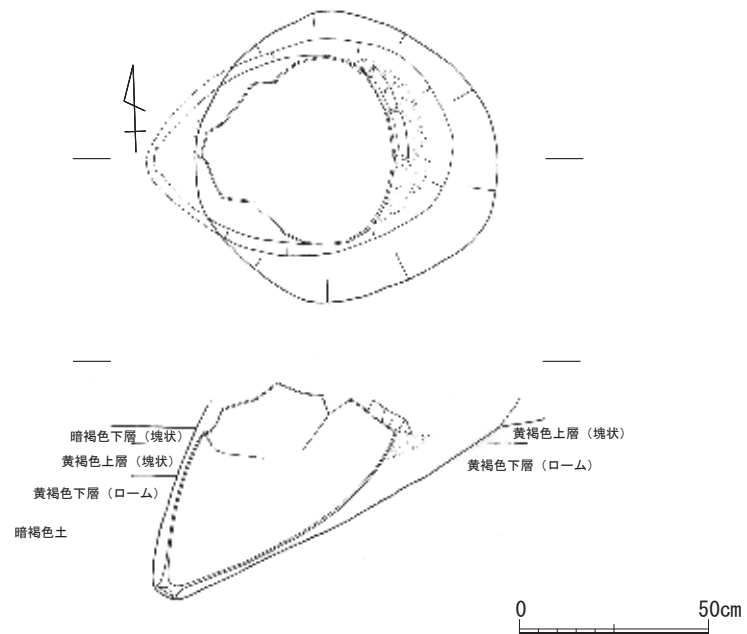


第13図 遺構実測図7 (S= 1/20) ※土層やレベル数値の記載漏れ及び写植位置等全て S55当時実測図のまま

20号甕棺

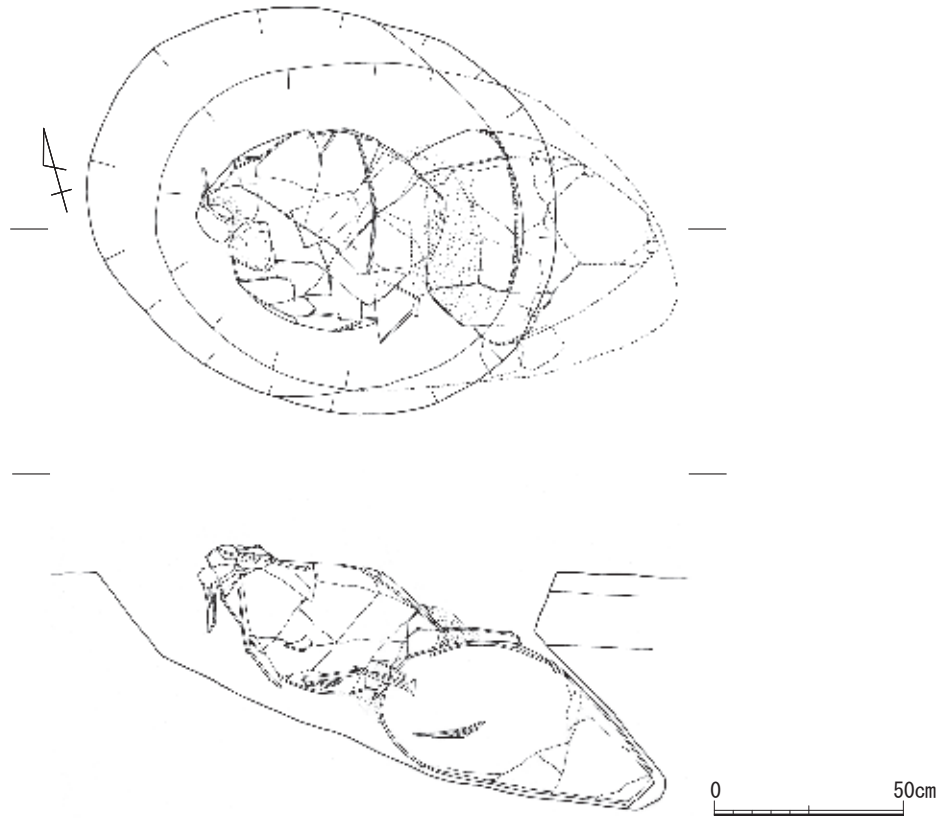


21号甕棺

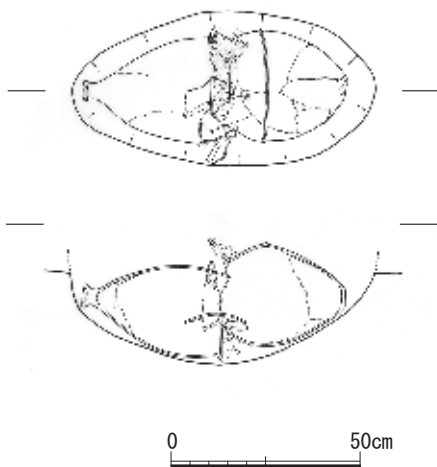


第14図 遺構実測図8 (S= 1/20) ※土層やレベル数値の記載漏れ及び写植位置等全て S55当時実測図のまま

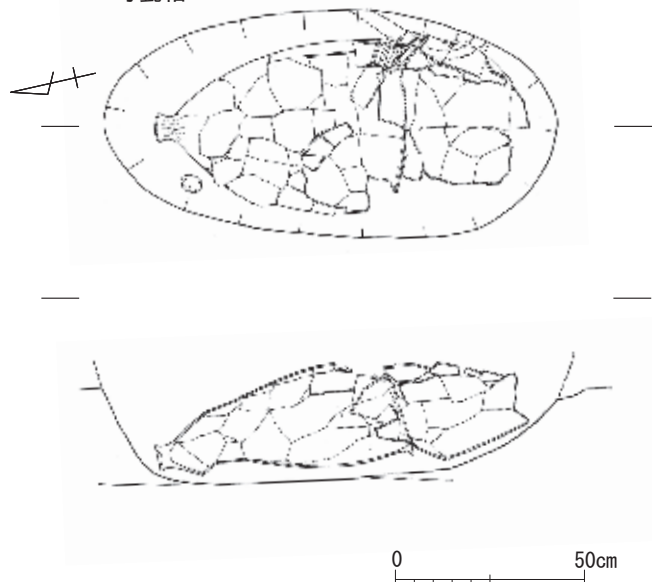
22号甕棺



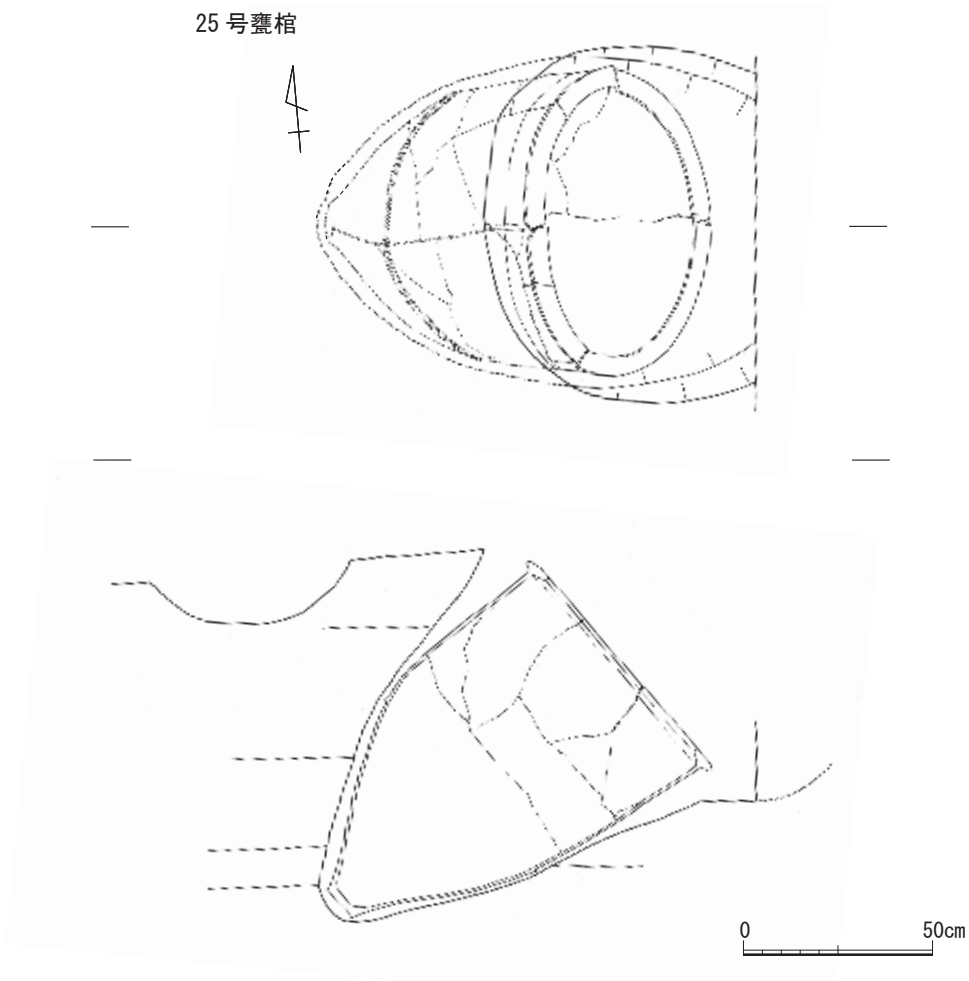
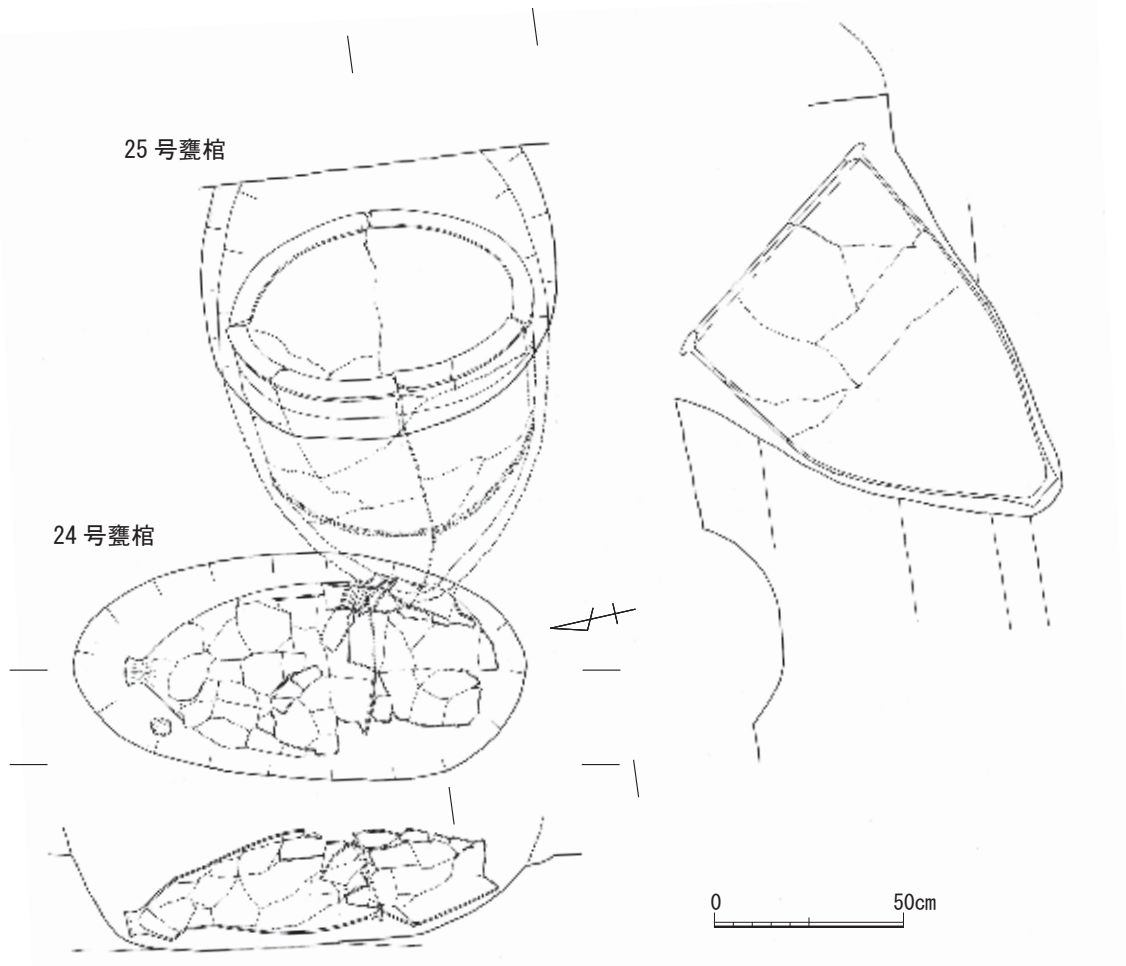
23号甕棺



24号甕棺



第15図 遺構実測図9 (S= 1/20) ※土層やレベル数値の記載漏れ及び写植位置等全て S55当時実測図のまま



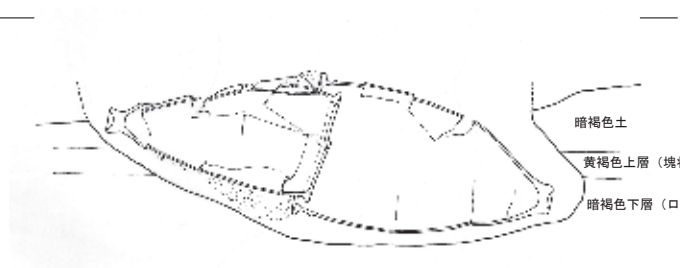
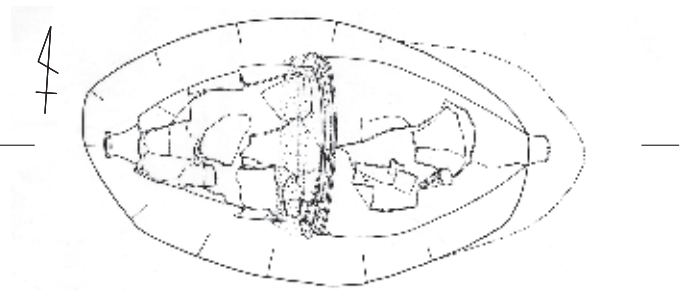
第16図 遺構実測図10 (S= 1/20) ※土層やレベル数値の記載漏れ及び写植位置等全て S55当時実測図のまま

26号甕棺



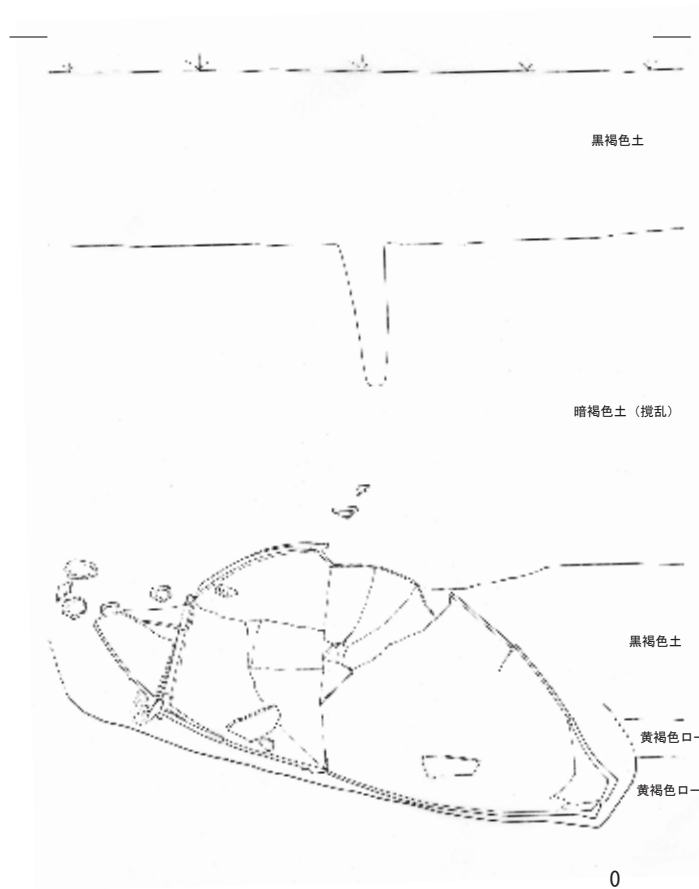
0 50cm

28号甕棺



0 50cm

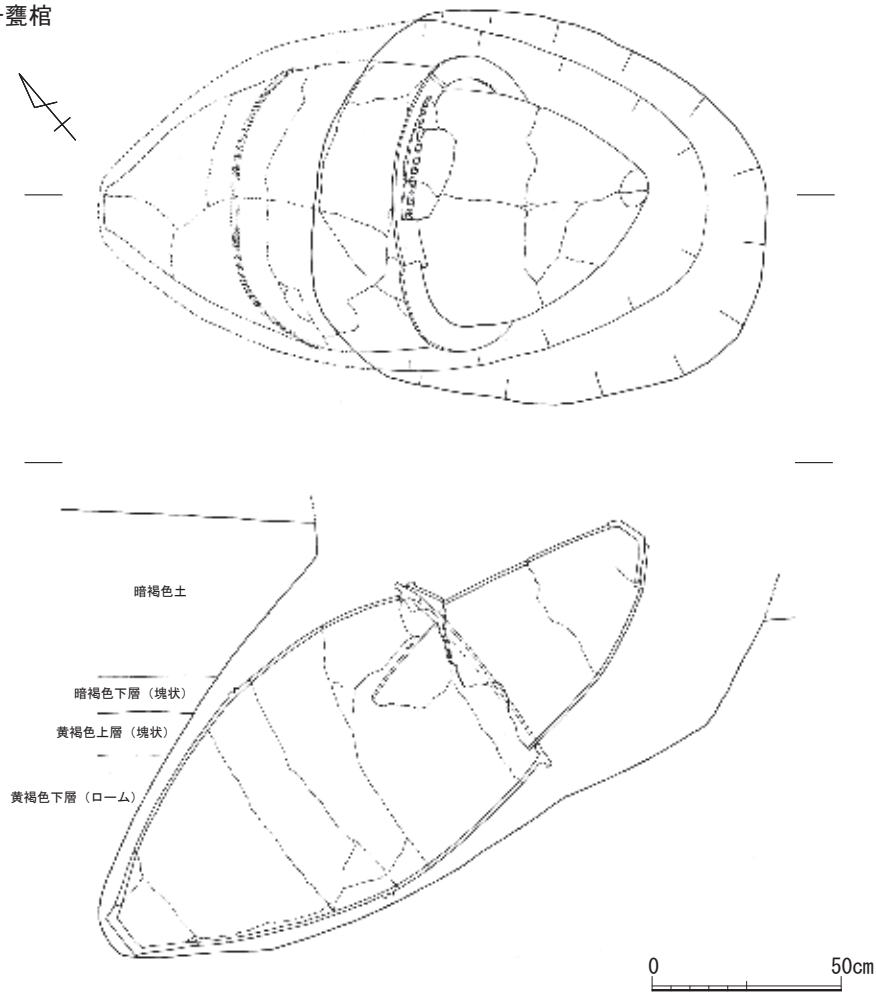
29号甕棺



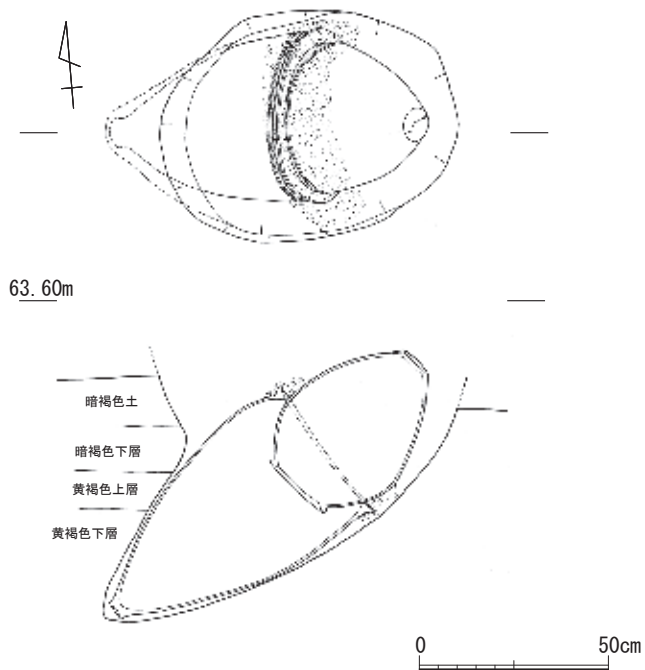
0 50cm

第17図 遺構実測図11 (S= 1/20) ※土層やレベル数値の記載漏れ及び写植位置等全て S55当時実測図のまま

30号甕棺

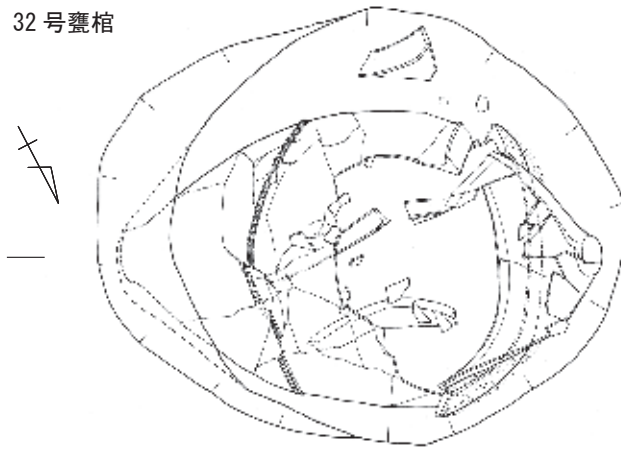


31号甕棺

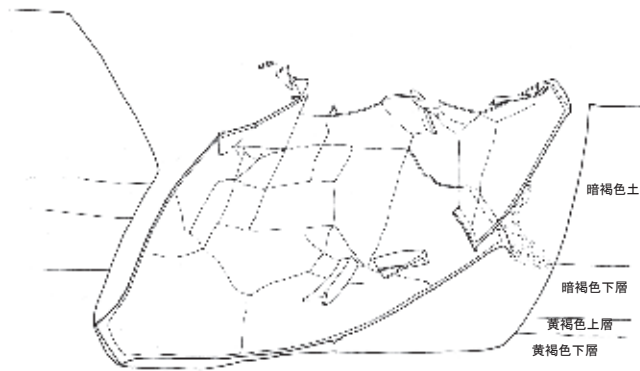


第18図 遺構実測図12 (S= 1/20) ※土層やレベル数値の記載漏れ及び写植位置等全て S55当時実測図のまま

32号甕棺

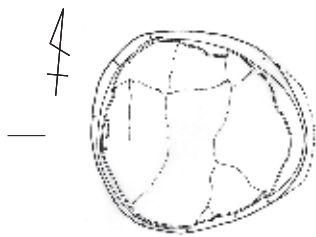


63.70m



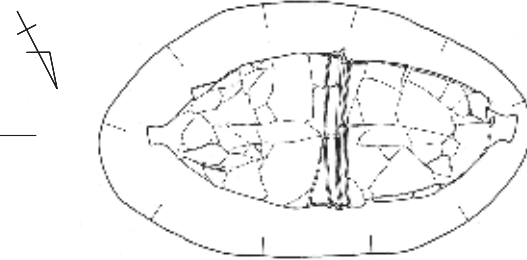
0 50cm

33号甕棺



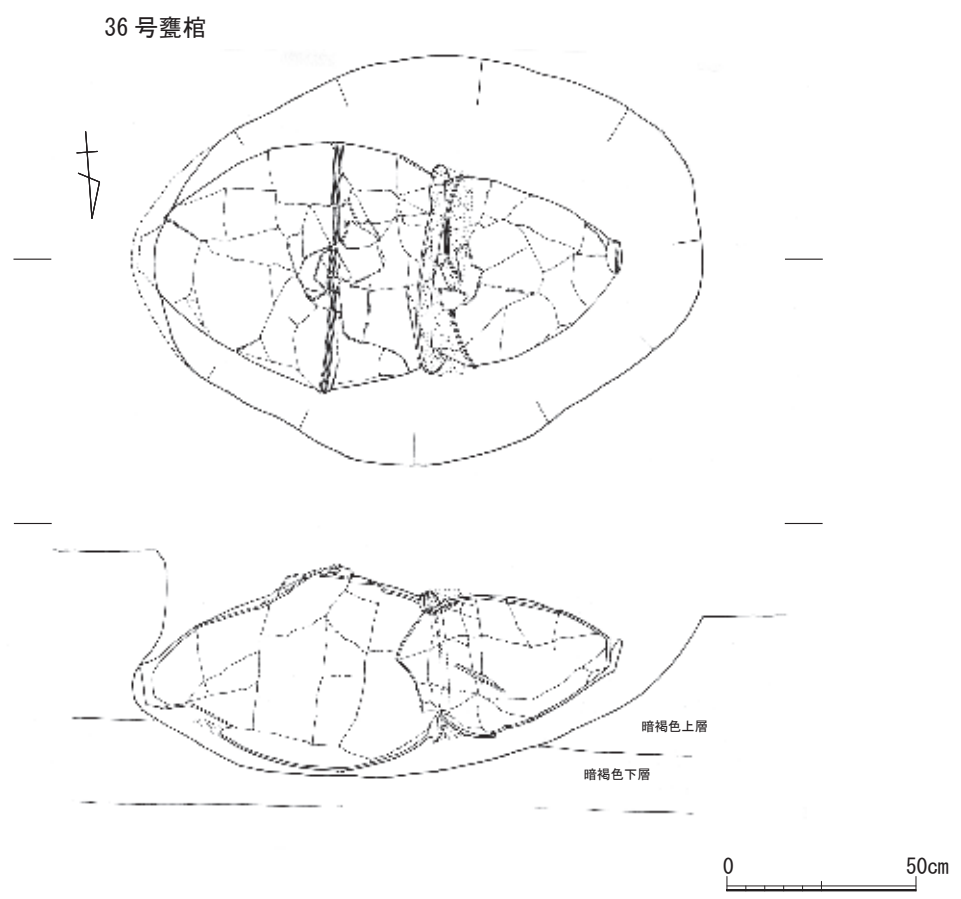
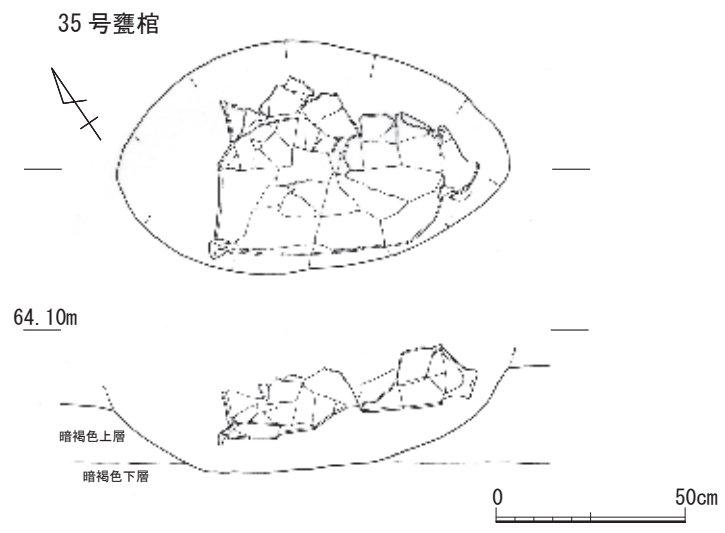
0 50cm

34号甕棺

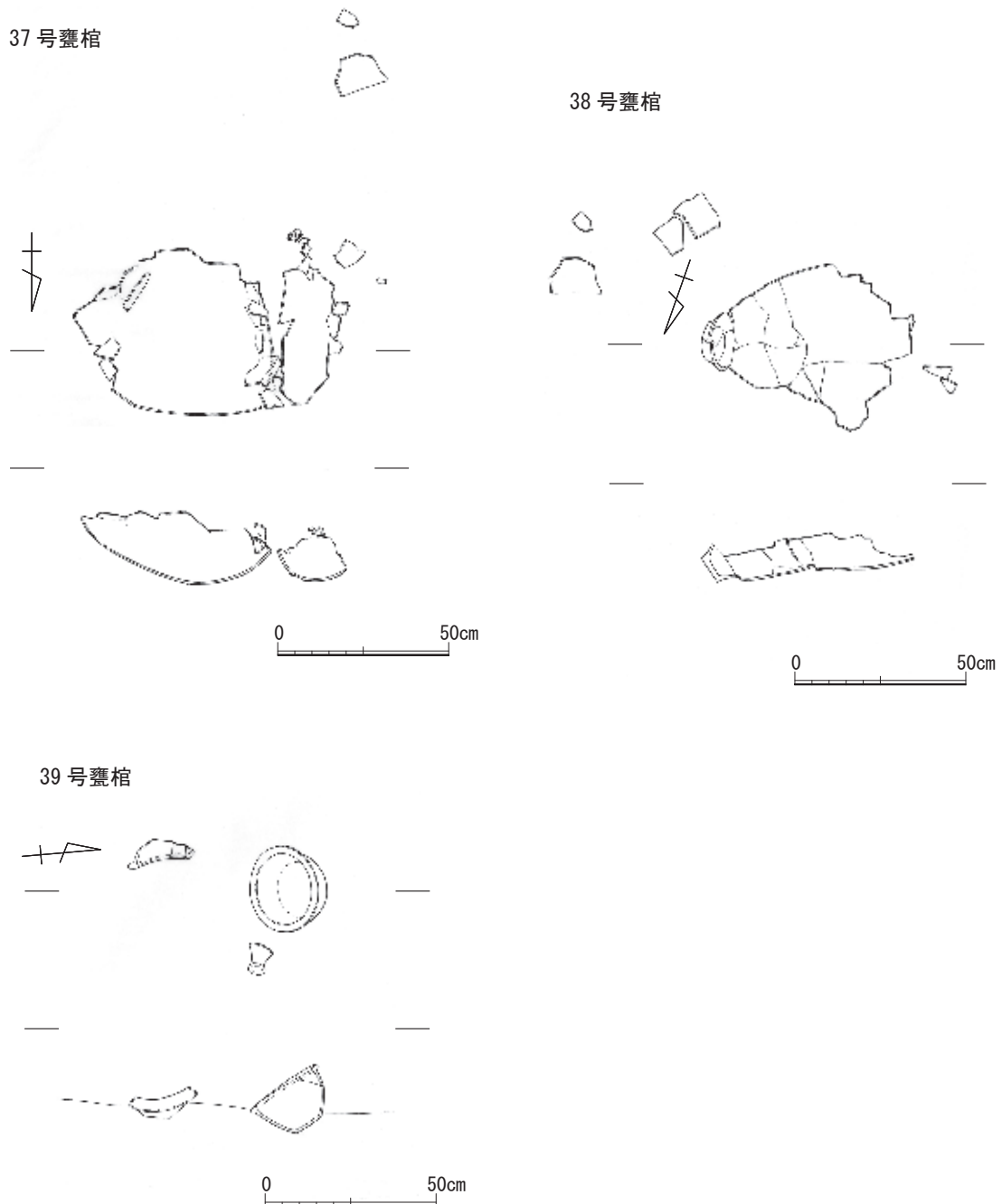


0 50cm

第19図 遺構実測図13 (S= 1/20) ※土層やレベル数値の記載漏れ及び写植位置等全て S55当時実測図のまま



第20図 遺構実測図14 (S= 1/20) ※土層やレベル数値の記載漏れ及び写植位置等全て S55当時実測図のまま



第21図 遺構実測図15 (S= 1/20) ※土層やレベル数値の記載漏れ及び写植位置等全て S55当時実測図のまま

が30基、須玖式が22基で、両者が混在した状況と言えるが、例えば41～43号の3基は、須玖式の成人用大形甕棺：蓋（上）＋甕（下）タイプが隣接しており、その配置が興味深い。

こうした土器様式の違いが埋葬された人物の出自を表すのか等、大変興味深いところであるが、残念ながら人骨等は検出されていないため検証は難しい。ここではその大きさの違いから、いわゆる「黒髪式」の小形棺は小児用甕棺である可能性が高く、

「須玖式」の大形棺は成人用甕棺である可能性が高い、という程度に留めておきたい。

遺構の「方位」としては、甕棺埋設の主軸が東西方向を向いているものが大半を占め、南北方向に埋設されたものは24号・29号甕棺など、ごく一部に限られるようである。

甕棺埋設の「傾斜」については3度・5度等ほぼ水平のものから30度前後までのものが多いようである。しかし中には、56.5度・67度等、かなり起き上